

佳作

わがまま 伊豆泥男



1

「ねえ、確認したいの」

「どうしたんだい堀木さん」

「瑞稀君は本当に、わたしのことを愛しているの？」

「そりゃあ、もちろん」

「じゃあわたしの、どんなところを愛しているの？」

「いろいろあるけど、例えば、優しいところかな」

「じゃあ、じゃあもしも」

「——わたしが優しくなくなったら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの？」

「——そんなことないよ。堀木さんが優しくなくなっても、僕は堀木さんを愛するよ」

2

翌日、堀木さんから優しさが消えた。

3

「それから言ったじゃねえか。堀木環は地雷らって」

呆れと憐れみをマドラーでないまぜにしたような表情の山元やまもと。ロシア人もびつくりの速度でアルコールを摂取しているため、呂律の回り様は喃語とほとんど変わらない。この男、外面はいいのだが、今日の宅飲みのようなクローズドな状況で酒が入ると途端にダメになる。そこが魅力でもあるのだが。

「たしかに堀木は美人ら！そこは俺も認めよう。けれどもしかし、性格が壊滅的なんらよ。彼女の元カレの松坂まつさかセンパイがろうなっただか、知らないわけじゃないらう」

もちろん忘れていない。堀木さん自身は何も語ろうとしないが、彼女の元カレの噂は嫌でも入ってくる。なんでも堀木さんと付き合い始めてから、目に見えてわかるほど豹変してしまっただけ。付き合い前は明るく朗らかな性格だったのが、どんどん衰弱し、陰鬱になったとか。別れた今でも病んでいて、大学を休学しているらしい。サークルにも全く顔を出さない。

「でもさ、それは松坂センパイとの相性が悪かっただけなのかも。僕なら……」

「いいや、あの女は全人類と相性がわるいよ。実際にこの前、お前が彼女を本当に愛しているとかろうとかで、ひと悶着あったんらろう？」

「それは確かにそうだけど」

僕は、自分の言葉のせいで優しくなくなってしまった堀木さんを思い出していた。愛されている自信を無くしてしまった彼女は、僕にその原因を聞いかけ、それを失うことで愛の存在を確認しようとしたのだろう。僕の勝手な憶測だが。

「それ見たことか。超下級のメンヘラだ。付き合った相手に依存して、相手にも自分に依存させて、養分を吸い取れるらけ吸い取ったらポイ、次の相手に行くらけさ」

メンヘラだという点に多少言いたいことはあったが、正常な思考を持った人間ではないという点は認めざるを得ないので黙る。山元はお構いなしに続けた。

「――芦屋お前、なんれ堀木に告白したんら？」

「……うーん」

そう、問題はそこなのだ。

実は僕は、どうして自分が堀木さんを好きなのかわかっていない。もちろん美人だということもある。昨日彼女に聞かれた時に答えた、優しいからというところもある。けれども、それは僕の愛の本質ではない。もっと大事な何かを忘れている気もする。いったいどうして、僕は彼女を愛するのか。それは彼女に

とってだけではなく、僕にとっても疑問なのだ。

言いよどむ僕にこらえきれなくなった山元は、ジャッククダニエルを一息に飲み干した。

「結局わかんねえのかよ。まあ、愛に理由は要らないとも言っしな……。お前がいいならそこに口出しはしない。けろ、俺はお前が、松坂センパイみたいになるのは見たくねえからな」

舌の回りはあやふやだが、力強い言葉だった。

山元はやつぱり、いい男だ。そしていい友人だ。彼を悲しませたくはない。しかしだからといって、堀木さんをあきらめようとも思えない。だから僕は、堀木さんに押しつぶされてしまわないようにするしかないのだ。

「心配してもらわなくても、僕は大丈夫だよ。山元が思っているほど、堀木さんは悪い奴じゃない。さあ、この話は終わりだ。グラスが空になってるぞ。次は何を入れる……」

僕は立ち上がり、冷凍庫を開けた。水がもうじき切れそうだ。山元に心配はかけさせたくない。ここはさらにアルコールを入れてもらって、僕の恋バナなんてすつきり忘れてもらおう。その方が、お互い幸せなはずだから。

酒をグラスに注ぐと、氷がぼきりと音を立てた。

4

優しさが消えても、堀木さんは堀木さんである。僕をむげに扱い、顎で使うような言動を繰り返しても、僕の彼女に対する

愛が変わることはなかった。逆に言えばそれは、彼女に言った「優しいところが好き」という言葉は、ともすれば嘘であるということ。当然彼女も、その矛盾には気づいていた。

一方的なセックスを終えた後、堀木さんは僕の耳元でささやいた。

「ねえ、確認したいの。瑞稀君はわたしのことを、愛しているのよね」

優しさが失われたことにより、語調は厳しめになっている。

しかし聞いていることは、先日の問いと同じである。そして、僕の答えも変わらない。

「もちろん愛しているさ」

本心からの言葉である。少なくとも、現時点では。

「そう。じゃあ具体的に、どんなところを愛しているの?」

そらきた。僕の方が聞きたい質問だ。とはいえここで正直に「分からない」と答えるのは誠実ではないように思えた。だから僕は、

「そうだね。堀木さんは美しい人だから、だから愛おしいんだと思う」

ぼんやりと天井のしみを見つめながらそう答えた。彼女が美人であるから惹かれているというのは、嘘ではないはずである。

それを聞くと堀木さんはむくりと体を起こし、僕の視界に入ってきた。僕の目をじっと見つめる彼女の顔は、やはり世にあふれている女性よりも整っている。吸い込まれそうなくらい大きく丸い瞳、下品すぎずそれでいて肉感を兼ね備えた桃色の

唇、間接照明のせいかいつもより艶めかしい栗色の髪、すべてが男を狂わせるためにあるとしか思えない。

「それじゃあさ」

堀木さんの口が動く。前髪の影が重なり表情は見えない。唯一見える口元は、いびつに歪んでいるように思えた。

「——わたしが美しくなくなったら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの?」

「——そんなことないよ。堀木さんが美しくなくなっても、僕は堀木さんを愛するよ」

5

翌日、堀木さんは熱湯を頭から被り、顔中に火傷を負った。

6

山元は、真剣な表情をしていた。今まで見たことのない、深刻な目をしていた。穏やかなコーヒー店には似合わない、今にも僕の胸倉を掴んできそうな剣幕であった。

「堀木環と別れる」

様々な感情を抑えながら、山元は言った。

「今回の事件でわかっただろう。堀木は危ない人間だ。間違っても、お前みたいな優しい人間のそばに在るべきじゃない」
その言葉は、きつと僕を第一に思つてのものなのだろう。これ以上僕が堀木さんと付き合ひ続けければ、僕の精神がもたなくならんと考えたのだろう。

確かに今の僕の精神には、大きな負担がかかつて在る。自分の言葉のせいで、彼女が大火傷を負つたのだから。平然として在る方がおかしい。

——しかし僕は、その重みを心地よく感じて在りた。

「山元には申し訳ないけれど、僕は堀木さんとは別れないよ」

山元の目元がぴくりと痙攣する。

「確かに彼女は普通じゃない。自分が愛されて在るか不安だから自分から熱湯を被るなんて、正気の人間のことじゃない。けれども不思議と、それを悪く思つて在りない僕も、確かに在るんだ」

それは感じたことのない感情だつた。もやもやとしたもので正体はつかめないが、マイナスのものでは無いことは分かつた。

この感情の正体が分かれれば、僕が堀木さんを愛する理由もわかるかもしれない。だから僕は、それまで彼女と別れるわけには在りかない。

「……そうかよ。じゃあ好きにすればいいさ。俺はもう知らねえからな」

そう言うと山元は伝票をかつさり、ずかずかとコーヒー店から出て在りた。地獄へ進もうとする僕を止めてくれる最後の

皆を、僕は失つてしまつたというわけだ。もう後には引けない。僕は手を付けないまま冷めてしまつたアメリカンコーヒーを、砂糖もミルクも入れずに飲み干した。
苦い。

7

「——わたしといつても安心感を得られなくなつたら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの？」

「——わたしの料理が美味しくなくなつたら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの？」

「——わたしとのセックスが気持ちよくなつたら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの？」

8

大きな痕は残つたとはいへ、堀木さんの火傷は直つた。しかし直つてからも彼女は、僕に問いを投げかけることをやめなかつた。そしてそのたびに僕は、それを否定した。もし堀木さんがその要素をなくしても、僕は君を愛することをやめない、と。もし僕が「そうだ。その要素をなくせば、僕は君を愛さないだろう」と肯定を返せば、どうなるかと考えなかつたわけには無い。しかし、自分の気持ちに嘘をつく気にはどうもなれな

かった。

堀木さんもまた、愛される要素を自ら失い続けた。安心感が愛の原因だと言えば、定期的に情緒不安定になった。料理が上手いことが愛の原因だと言えば、漂白剤をホワイトシチュウに投入した。セックスが気持ち良いことが愛の原因だと言えば、その先は言わずもがなである。

それでもやはり、僕の愛がついえることはなかった。それどころか僕は、付き合い始めたころよりもっと、堀木さんに強く惹かれるようになっていた。いったいなぜ、僕はこんなに強く彼女を想うのか。その本当の原因が、もうすぐでわかりそうになっていたある日のことだ。彼女はベランダで煙草をふかしながら言った。

「瑞稀君はわたしがどうあっても、わたしを愛してくれるみたいだね。例えばこんなことをしたとしても」

堀木さんは僕の顔を煙を吹きかける。以前僕が彼女に、酒や煙草に溺れないところを愛していると言ったことを思い出す。

「だから、わたしなりにも考えてみたの。瑞稀君がわたしを愛する理由。瑞稀君に聞いても埒が明かないから」

「別に今までの答えも、嘘というわけじゃないんだけどね」
僕の小さな反論は、月の光にかき消された。

「瑞稀君がわたしを愛する理由、それはわたしが、『堀木環である』からでしょうっ。」

しばしの沈黙。

「瑞稀君はわたしを、堀木環であるだけで愛してしまっている

の。優しいからというのも、美人だからというのも、安心感も料理もセックスも酒も煙草も、全部後付けの理由に過ぎないの」
その回答は、確かに納得できるものだった。僕が堀木さんを愛する理由が、堀木さんであるというものだけならば、彼女が要素を失えば失うほど愛が深まることにも説明がいく。無駄な要素をそぎ落としていくことによって、彼女の堀木環性が高まったと考えれば、一応合点は付く。

しかしその理由は、多分――

「だからさ、もし、もしもだよ」

堀木さんは、いつものような言葉を、しかしいつもより核心を持つて、紡ぐ。

「――わたしが堀木環でなくなったら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの？」

そして僕も、いつものように答える。

「――そんなことないよ。堀木さんが堀木さんでなくなっても、僕は堀木さんを愛するよ」

なぜなら僕は、そんな理由で彼女を愛しているわけでは無
から。

僕が堀木さんの問いに答えると、彼女は笑い、そのまま背中
でベランダの柵に体重をかけ、逆上がりでもするかのよう
にひっくり返り、そのままマンションの五階から落ちていった。
その瞬間僕は、どうしようもなく絶望し、そしてどうしよう
もないくらい、彼女を愛おしく感じた。

10

堀木さんが目覚めたという連絡が入り、僕は病院へと走った。
講義から飛び出すときに、山元が僕の名を叫んだ気もするが、
僕は立ち止まらなかった。

病室のベッドにたたずむ彼女は、虚ろな目をして窓から外を
見ていた。ガラスに映る彼女の顔からは、感情は読み取れない。
堀木さんは口を開かない。それならばと僕は、彼女が生と死
の狭間で揺れていたこの数日で考えたことを、話すことにした。
「堀木さんがいない間、どうして僕は堀木さんを愛しているの
か、考えてみたんだ」

堀木さんは口を開かない。

「優しいからというのも、美人だからというのも、安心感も料
理もセックスも酒も煙草も、全部後付け。堀木さんはそう言っ
たよね。それは確かに間違っていないんだと思う」

堀木さんは口を開かない。

「けれども、『堀木さんが堀木さんだから』なんて禅問答みたい
な理由も、それはそれで間違いだつたんだ。なぜなら、堀木さ
んがベランダから飛び降りて地面にぶつかったとき、僕はそれ
までで一番、堀木さんを愛おしく感じたんだ。堀木さんの存在
をそのものを愛しているなら、堀木さんが死ぬことには絶望し
なくちゃいけないのに」

堀木さんは口を開かない。

「だから僕は、堀木さんの存在を愛しているわけじゃないんだ。
じゃあどこを愛しているのか。そこで僕は、堀木さんと出会っ
たときのことを思い返したんだ」

堀木さんは口を開かない。

「僕が堀木さんを知ったのは、松坂センパイを経由してだつた。
サークルの先輩だつたあの人が、彼女ができたことで弱ってい
ると聞いて、気になってこそそこそ調べていたんだ。その時も堀
木さんは、彼氏である松坂センパイに自分を愛する理由を聞いて、
答えとして帰ってきた要素を、一つ一つしらみつぶしにし
ていたらしいね」

堀木さんは口を開かない。

「僕が堀木さんのことを気になり始めたのは、ちょうどそれを
知ってからだつたと思う。堀木さんが身勝手に松坂センパイを
振り回すところを見て、僕は君に惹かれていった。そして君た
ちが別れたと聞いて、僕は君に告白した」

堀木さんは口を開かない。

「それからは堀木さんも知つての通りさ。君は僕の告白を受け

入れ、僕たちは付き合うことになった。——さて、ここまで言えれば、もうわかったかもしれないね」

それでも堀木さんは口を開かない。僕は答えを発表する。

「結論を言おう、僕は堀木さんの、わがままなところが好きなんだ。勝手に自分に自信を失い、その不安で僕を傷つけるところが愛おしいんだ。堀木さんのそういう、醜いけど人間らしいところを、僕は愛しているんだよ」

堀木さんは僕の言葉を最後まで聞き、緩慢に振り返った。

そうしてようやく堀木さんは、ゆっくりと口を開いた。

「——じゃあわたしが、わがままじゃなくなったら、瑞稀君はわたしを愛さなくなるの?」

1 1

翌日、堀木さんからわがままさが消えた。

1 2

山元は、ほとんどスープのような学食のカレーを口を含みながら言った。

「それにしても、堀木も丸くなったよなあ。一時は飛び降りまじったのに」

「飛び降り……ああ、あの時は大変だったよ。警察の人は僕が突き落としたものだとして疑わなかったし」

「状況的にそう思われるのも仕方ないとはいえ、無実なのに前科者になるのは、たまったもんじゃねえよな」

とはいえそれももう半年も前の話である。月日の流れというのは恐ろしいもので、警察沙汰になったことも、かなり薄れた記憶としてしか残っていない。

「あの時はほんとに心配してたんだぞ。お前が松坂センパイみたいに病んだらどうしようかと」

「あれ? 俺はもう知らないとか言ってたっけ?」

「馬鹿野郎。本気なわけねえだろ」

こまかすために話の方向を変える。

「それにしても、なんで堀木はいきなりあんなにしおらしくなったんだ? 自殺未遂をやらかしたからと言って、人間あそこまで変わるものなのか?」

「まあ、いろいろあったんだよ。強いて言うなら、僕と堀木さんは、相性が良かったんじゃないかな」

「相性、ねえ。そういえば、宅飲みした時にそんなこと言ってたかもな」

「よく覚えてるね」

忘れさせるために飲ませた大量の酒は、山本には一切効いて

いなかっただらいい。こうなると本当にロシア人なんじゃないかとさえ思えてくる。

「お、噂をすればご本人登場だ。俺のことはいいから、早く彼女のところに行つてやんな」

山元の視線の先では、学食の窓の向こうで、堀木さんがにこやかに手を振つていた。火傷の跡はまだ完全には直つていないが、それ以外の全ては、付き合ひ始めたときと同じ、もしくはそれよりさらに磨きのかかった、理想的な彼女。優しくて美人で安心感があり、料理もセックスも上手く、酒にも煙草にも溺れない、そんな女性。

僕は山元に礼を言つて、堀木さんの方へ行つた。

「よつ。山元君とご飯食べてたんだ。何話してたの？」

「昔のことを、ちよつとね」

僕たちは並んで、次の授業の教室へと歩き出した。そうして僕はふと、あの時のことを思い出してみた。

堀木さんが五階から落ちたあの時、もしも彼女が死んでいたら、きっと僕の愛は永遠になつていたのであろう。自分勝手な思い込みで僕を振り回し、あまつさえそのまま自殺するなんて、どうしようもなくわがままだ。つまり、どうしようもなく僕好みだったということだ。僕は彼女のことを、一生忘れられなかつただろう。

しかし今の彼女に、そのようなわがままさはない。自分に自信をなくして、僕に愛する理由を聞くこともなくなつた。僕はもう、彼女のわがままに振り回されることはなくなつた。

しかしそれはあくまで、直接的なわがまがなくなつただけだ。堀木さんは今でも、わがままなままだ。なぜなら彼女は、わがままではなくなつたのだから。

ややこしい言い回しになるが、堀木さんがわがままではなくなつたのは、彼女のわがままによるものなのだ。彼女は、僕が彼女のわがままなところが好きだということを知つて、わがまをやめたのだ。決して僕の好みになつてくれない。これをわがままと言わずしてなんと言おうか。

山元をはじめとする周囲の人間は堀木さんのことを、見違えたあの豹変したあの言つてているが、実は彼女の本質は、ほとんど変わつていない。

——だからこれは、僕だけしか知らない、堀木さんのわがままなのだ。

僕の手を指を絡ませ並んで歩く堀木さんの横顔をじつと見つめ、僕は言つた。

「——確認したい、ことがあるんだ」

「瑞稀君？ いきなりどうしたの？」

「堀木さん、君は本当に僕のことを——いや、何でもなし」

僕は言いかけた言葉を飲み込んだ。その確認は、きつともう僕らには必要のないものだから。